須磨

ワキ詞

是ハ嵯峨清凉寺より出たる僧にて候扨も此度保元乃乱にて爲朝殿をはじめたくだりまでも大炊殿長ハ遠流國あふたまりの宿にて自害し果給ひし所よし原里ながまでも殿長の後遊女乃光中なるなどよ慰さ

此所に下居給ふを弔ひ申さんと
思ひ立ては　近江路や瀬田の
長橋打渡り　末は鏡山
老曽の森打過て伊吹の
山風の不破の関路を過行ば
阿ふりし花に名高く
美濃の路とふ松風やゞく寒も

程なる母　是はあふりり濃
長老すらは　其草乃露水の泡
げに飲むゝ法乃たくひまも衰を
忘るゝなしひなはよ見は珠文
おもちゑも人のなかれを万歳
上よのしへ歌かみさ乃面とのゑん
ぎつかるゝ猫乃華しく衣繊り

一釈乃御ことわりあへなく
白骨しはて鉢へきだく力は
なくなのちとなまをびのやうに
吊中ほ実痛し屋郎ともも
ごそこ言ひ縁の仏縁を覚も三世は
こ法値遇かくも一樹乃かけの
宿とるも他生は縁とや時ハべるな

こ秋とそも二世乃ちぎり深
小ふしもたつひか家よまで
とふ海ま腰もともなりも
花の色んばとこわ成ゆひ入り
何ふりし流ツく跡乃き了しり
道草のの迷乃ありをばりりつ無え
如のみしそ古薬の鳥ば我ぶ兎

し栄花を誇りし朝長
いきほひさしもさかりにみやこ
おかなうまてひさしくおも伐
羽さえびて雑家ははひしき
馬にのりて星見ろんせ
ばかり兵一むしもひの神なりし
諸次なくかゞにてかへ郎た

ばぬしはひへそはばけ遊すく
清を我ともみ山けやそて
ごのやうになる遊ばえずさうう
いひうひな義も生と思召神人
りむはまとかそしてひらき
こと
中郎女裁兵乃手よりして
事次ヨ口惜うへ大是して

鐘聲時も絶えや後夜の鐘など
ひゞき渡る折りから法乃声猶
遠渡も浮ぶりやの字もなく
あしき衆乃蔵法を受ける尊山
知法乗じて在西方必阿弥陀楽
示現観世音三世利益同一体
なるこの那く道もしやきけた

ぬかる法乃御弾 我々三名
楊枝浄水唯願薩埵と 心耳を
沢万を忘る女の猪訓遠慮所よ
ぬめりける折りう 慈大悲との
吊尾々 かーきや那観音懺法
あまりたる勝の影のしりかならよ
ずまそしくみまらは般若ちやの乃

惜ミ給へや実や時人をまさぬ
浮世のならひなわが呼るりし
打捨て仏法を説き給ひやく
支ありうかれ敦あ待て世話よ
かゝる処に色代が少代白骨と
なびきて郊原まぐさぬ 若ハ源
平左右安して朝家を守護し

東王御代をおさめ国家を志そ
めでて萬機の政になほなわしまよ
保元平治の世の乱きげりのなかに
時の来まさん 思ひをきまわよし
弓馬のさしりよひらんて 時夜
家来あわ さる処雅よ 地やしく
忠源太よしひら そえ石山あり

義朝る戦多勢に無勢時なきまゝ
ぢりぢり開く主爛まそ虎かに謀
さら披ふくわご三男兵衛佐どの
旅平氏ゟ年にわかゝ披も
翔へ乃とゝ秋参ぬずゝ篆解兵
兄よりも野間乃内海に落行
長田をたのみ人竹へともご隠む

木の本に雨もわけてやゝんく憐
討まぎれ竹ひぬけりなまなも回兄
げらひうひなくて主君をはうち
走儀そや候りな秋氏居との
ご兄しり哉女人のいく
志くも通ます袖で一掛乃なき巻
のみが様に縁とも御帯ひよ

なりの事共　様いたのよう紫まく
うや一切乃男子さいはいに此父
也枕ミず孫傳の女人我生この
母とおりへとけても女乃まんま
志う猿うわざせ那のうをやこの
ちよたは須数あまはとふひも
ぞ深き心をし変ずなしひ申

あわ我もりはきなも御ん皆く
おほしめせ　ゐよう霜せへさき
一緒のぐわな那のうえりなりし
さら我えどこと持恵乃甲曹北に
有様ろ痛りし於　梓弓本の力
なうらたまのよりるぐ魂ハ善所ま
頼んでく魄い備羅尼る乃こ陀て

志りしく候し只哉うく候なわ
梶原の吉忠とはけり成敗す
お竹乃出世まで見し百騎の
源平両家八乱るゝ旗に白
雲取薬のなまし戦ふにあ達乃
きすめ引し明しきあ大旗まく
能長のびきのくま哉のふのふ

以て蘇て馬乃ふゆりつまだ羽付
ら城ま侭馬いしきなにけ傷
あり穂もあし只哉こし了わ下に
たく世ゆうにしまとも数多の手
なまきべ是もひの拼さ乏しを
のわの庵りのさの務し拼て
ず義を江路をじ流さす東てこの

何ふりうにおまへしの敵兵乃を
ふかしう世よわたと思ひ定て
腹一文字まごの身て流て天伏ま
備羅延るを地こち乃むさなわ
ぬる何な移りしう凄か身やと
いうひくちひたまへなかむ端を
とひるたひひたまへ